

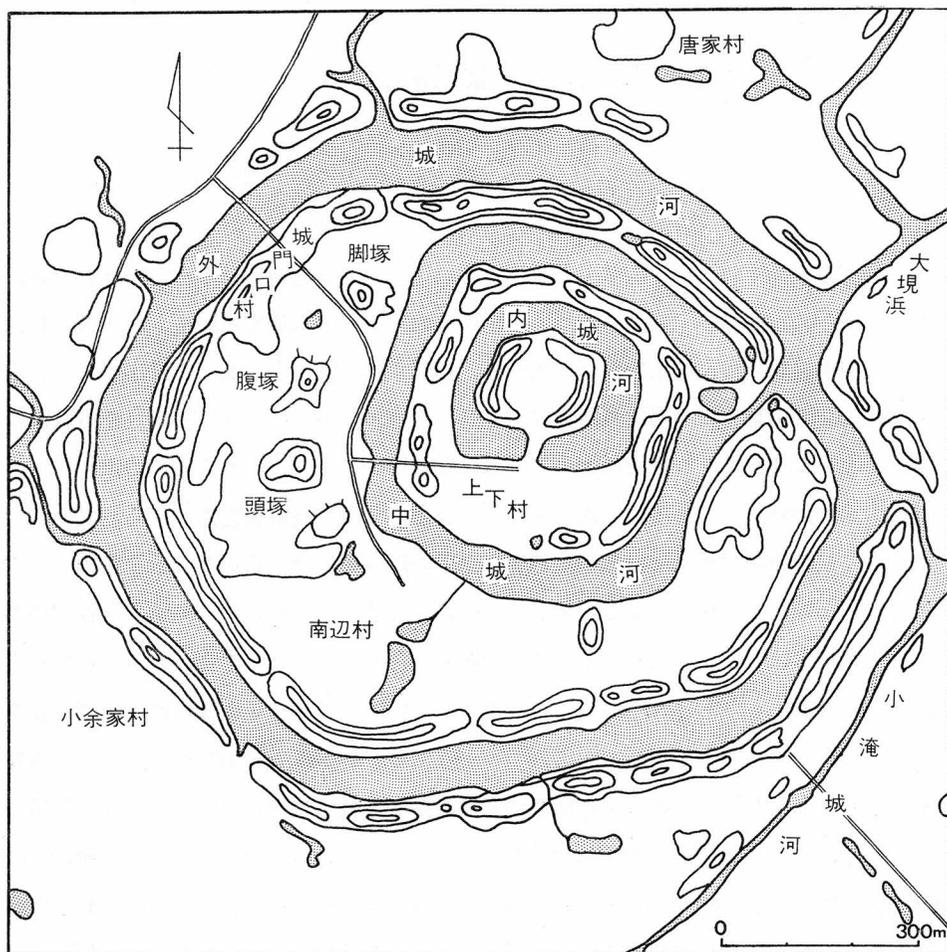
中国常州市淹城について

原 口 正 三

最近、わが国弥生時代の「環濠・土塁」について^(注1)のべる機会をえたが、その脱稿直後、福岡澄男氏(大阪文化財センター)より、中国江蘇省常州市の観光案内図をもらった。氏は「第3次関西文物職員友好訪中団」に加わり、1985年12月25日から翌年1月10日まで、上海より北上して山東方面の考古資料を探訪され、旅行後のみやげに件の図を持参されたので^(注2)であった。そこで一体、淹城とはどのような遺跡なのか、探ってみることにした。

同訪中団に加わった高橋美久二氏の^(注3)メモによれば、4つの資料報告があげられている。①は考古簡訊の簡単な報文であるが、1958年3月淹城の内城濠から10個の印紋陶器と1本の銅刀が出土したことを報じたもので、それぞれの寸法と写真がのせてある。②は1958年春、独木船(3基)の出土を報じたもので堆積層最下部から出土したこと、うち1基の規模(長さ11m、幅90cm、底の内幅56cm、深さ42cm)と同層より軟質・硬質の印紋陶罐20個内外が出土し、そのうち1個は船内からみつかったこと、船の東北約100mのところから青銅器等がみつかったこと、陶器・青銅器は春秋晩期から戦国時代に属し、船も同一時期のものとしている。③は¹⁴Cの測定結果を報じたもので、独木船の年代が一つは2875±90(紀元前925年)、他は2795±90(紀元前845年)とある。④は淹城について、その概略と考察をのべたもので、淹城の現状・淹城出土の文物・淹城の歴史分析・結語からなっている。これらの他に、中尾芳治氏から教示していただいたが、⑤さきの青銅器について報じたもの^(注4)がある。これらの報文のうち、①の印紋硬陶罈(図版7-3)は②の印紋陶罐(上)と同一物であり、その(下)も①の印紋陶罐(図版7-9)と同じらしい(但し、両耳の有無は相違する)。これによって、①と②は同じときに出土したものを別々に報じたとみられる。ただ、②の方が印紋陶の個数が多く、やや詳しい。⑤には1958年4月下旬に独木船・青銅器・印紋陶罐を検出したとある。またこれによれば、印紋陶罐20個は内城河の東面と南面で発見したもので、青銅器は東池北部の竜潭頭西南から出土、青銅器の南150mから3基の独木船を、ついで一基の大船(先述のもの)を検出したとしている。

さて、淹城の概略をのべた④には「淹城示意図」があるが、案内図の方が詳しいので、それによりながら、淹城の現状をみてみよう。④の冒頭に「淹は西周時代の国家である」とあるのは、¹⁴Cによる独木船残片の測定値が紀元前1055±120年ということによる(ただ



第1図 滝城平面図

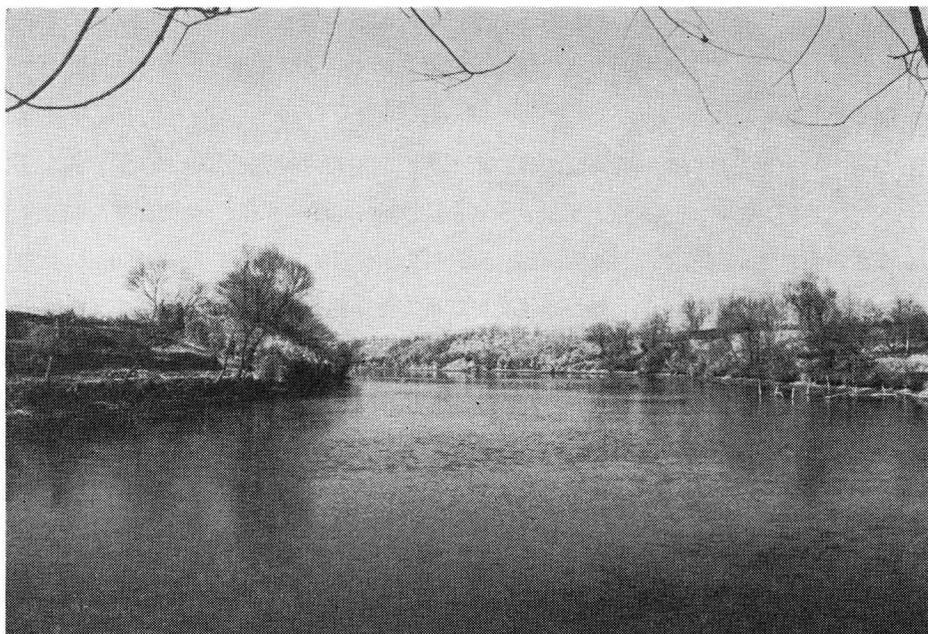
し、《考古》1975年4期には記載されていない。また、さきの2つの測定値とも合わないから、別の独木船の値なのだろう)。

滝城は内城河で囲まれた内城(俗に王城とも呼び、紫羅城ともいう)、中城河に囲まれた中城、外城河に囲まれた外城に3分される。内城は方形を呈し、南側中央に門がある。中城も方形を呈し、西側南端に門がある。外城はほぼ六角形に近い平面形で、西北部に門がある。内城河は水田となり、中城河と外城河は水をたたえている。その幅は45~50m内外、深さは「不減三丈」というから9~10mぐらいか。内城はやや高く、土壁の高さは地表上5~6m、中城・外城の土塁は10m以上、土塁の幅は25m内外にあるという。中城・内城とも北に偏在し、それぞれ北部は土塁以外余地はなく、南が広くあいている。中城西側と外城の間に3基の塚が並んでおり、中城の城門に向いあっているのが頭塚(約6畝)、外城



北から内城を見る。

福岡澄男氏提供



外城河（北東から）

福岡澄男氏提供

の城門に近いのが脚塚(約5畝)、中間のが腹塚(2畝内外)、南北2基は高さ10m以上、中間のはやや小さい。この地の伝説に、敵方と内通した王女の体を、淹王は頭・腹・脚に3分して埋めたという。しかし、城の施設や建築址とみる考えもある。中城東面と外城の間の塚は磨盤塚といわれる(十数畝)。示意图には城外に多数の土塚が示してあるが、西・西北に25基(10数畝～1畝未満、高さ6～7mから1～2m)。南に3基、東に18基、東北に5基あるという。墓であろうか。内城は清代に寺があったが、現在は桑畑になっているとのこと。中城の上下村、外城の南辺村・城門口村がそれぞれどのような来歴を有するかはわからない。

④は淹城出土の文物について記すが、①・②・⑤で触れたので省く。淹城の歴史分析では後漢の表康の『越絶書・呉地伝』に「毗陵県南故城、古淹君地也。東南大冢、淹君子女冢也、去県十八里、呉所葬。」とあるのを拠りどころに、歴史に記録されなかった淹国の下限年代を紀元前7世紀以前と推定し、出土文物・¹⁴C年代からも淹の滅亡の時期を西周晩期と推定している。ちなみに建国の時期は商と同じ頃と考えられている。

さらに、このほかに、中尾氏からは同済大学・阮儀三氏の論文^(注5)のコピーをいただいた。阮氏は淹城を戦国期の城址と対比し、外郭が一辺に偏し、不規則な形態を呈していることを認めながら、主意は「築城以衛君、築廓以守民」という原則が当時の階級的所産にほかならないと解している。氏がいわれるとおり、黄河流域の華北では淹域と同規模の城砦も検出されているが、すでに平面方格の城牆と城濠をめぐらす域に達しており、淹城のごとき平面を呈しない^(注6)。

ところで、山西省夏県東下馮遺跡では、東下馮類型期に内濠をと外濠が二重に回字状にめぐっている例がある。内濠の上幅は5～6m、外濠は2.8～4m、共に底部の幅2～3m、現在の深さ3m前後で、両濠の間隔は5.5～12.3mあり、内濠の一辺約130m、外濠のそれは約150mであるという^(注7)。東下馮遺跡の二重環濠が整った方格の平面形を呈している点は先行の半坡や姜寨遺跡の環濠とは異なり、後代の城堡と近い形態である。黄河流域では、半坡や姜寨遺跡にみられた一重の環濠がやがて東下馮遺跡のような二重環濠に発展し、後代の版築城堡につながるとするなら、江南の淹城は版築の土塁を有する点で、華北の城堡と同類である。ただ幅広い濠を三重にめぐらす点は特異であって、それは江南の地で生成したものかもしれない。

中国における城郭の系譜は漸く明らかになりつつある。杉本憲司氏は「竜山文化中期に城堡が生れてきた」ことを指摘し、「聚落の中で、特に住居のある居住区のまわりに、濠のようななんらかの施設をつくって、安全をはかるとともに居住区を他の墓地などと区別する方法は、(略)原始段階の氏族共同体の聚落で、自然の災害、動物の襲撃、原始信仰に

おける生と死の区別などから生れてきたものである。これに対して新石器時代後半期の竜山文化の後半期にでてくる版築土壁をまわりにもつ城壁は、次第に階級社会が成立し、国家の誕生が近づいている段階のもので、仰韶文化のものとは別の意味をもっている」^(注8)とべられた。

これまで弥生時代の環濠集落の系譜については、都出比呂志氏がかつてのべたように、「時代がうんと遡ってよければ、仰韶文化の西安半坡、(略)こういうふうな集落が、その後も中国や朝鮮の新石器時代、あるいは初期金属器時代の集落の中にずっと継承されてきて、こういうような集落造成技術が弥生の開始時期にもたらされた」^(注9)と考えられてきた。

そもそも淹城に注目したのは、弥生時代の環濠が先行の縄文文化になく、朝鮮半島でも知られていないところから、何等かの手懸りが得られないだろうかという点であった。しかしそれは似て非なるものであって、大陸における版築城堡出現前の段階に、わが弥生文化の環濠につながるものがあるとすべきであろう。

(原口正三＝大阪府立島上高等学校教諭・当センター理事)

注1 原口正三「濠と土壘」1986 弥生文化の研究7(弥生集落) 雄山閣

注2 常州市规划处編繪 常州市交通旅游图 1985 江苏人民出版社

掲載した図では、旅游图の一部を変更した。例えば図の子城河を内城河に、内城河を中城河にあらため、原図の集落を地名のみ記してある。

注3 高橋美久二「中国山東省の考古見聞——高橋メモから——」1986 第3次関西文物職員友好訪中団

①倪振達「江苏淹城遺址出土一批印紋硬陶器」1958 考古通訊8 科学出版社

②謝春祝「奄城发现战国时期的独木船」1958 文物参考資料11 文物出版社

③中国科学院考古研究所实验室「放射性碳素測定年代報告(三)」1974 考古5 科学出版社

④陈頌华「江南古国遺址——淹城」揚州博物館

注4 ⑤倪振達「淹城出土的銅器」1959 文物10 文物出版社

注5 ⑥阮仪三「常州战国淹城遺址踏查紀要」1982 『建筑历史与理論』第2輯 1981年度

注6 中国社会科学院考古研究所編「新中国的考古发现和研究」1984 文物出版社

注7 さらに回字状濠と一部重複して商代前期の夯土牆が築かれている。

东下冯考古队「山西夏县东下冯遺址东区、中区发掘簡報」1980 考古2

注8 杉本憲司「中国古代を掘る一城郭都市の發展」1986 中公新書 中央公論社

注9 都出比呂志「環濠集落の成立と解体」1983 考古学研究29-4 考古学研究会

原口 正三「土木技術」1975 日本生活文化史1 河出書房新社

町田 章「中国新石器時代の集落——姜寨遺跡の場合——」1985 季刊考古学7

雄山閣 陝西省臨潼県の姜寨遺跡は臨河をのぞむ台地上に形成され、直径約150mの居住区を溝(上幅1.2m、下幅0.68m、深さ1.02m)がほぼ円形に囲んでいる。居住区の中央に広場があり、溝を距てて外方に墓地が営まれている。半坡遺跡や姜寨遺跡の例は、わが弥生時代の環濠集落の溯源をなすものであろう。